フィールドとしてのヨーロッパが、調査領域と生活領域の交錯する現場であることを意味する。生活実践に観念体系や理論的問題をリアルタイムに接合するとなれば、ヨーロッパ人類学の挑戦から新たな知見が生まれてくるような予感がしないでもない。そうした意味でも今後の発展が楽しみな分野であり、本書はガイドラインとして、必携の日本語文献となるはずである。

参照文献

LEGENDRE, Pierre
1999(2003) *Sur la Question Dogmatique en Occident Aspects* Théoriques. Librairie Arthème Fayard.（『ドグマ人類学総説』西谷修監訳：平凡社）

DUMON, Louis
1986(1993) *Essays on Individualism: Modern Ideology in Anthropological Perspective.* University of Chicago Press.（『個人主義論考』渡辺公三・浅野房一訳：言叢社）

MARCUS, George
1998 *Ethnography through Thick & Thin.* Princeton University Press.

PARMAN, Susan (ed.)
1998 *Europe in the Anthropological Imagination.* Prentice Hall.

（織田竜也・東洋英和女学院大学）

六車由美著
『神、人を喰う——人身御供の民俗学』

東京，新曜社，2003年3月
273頁，2,500円（＋税）

「神が人を食べる」。「人身御供」は、そのおぞましさから「毒抜き」を施され、これまで民俗学や文化人類学で正当に扱われてきたとはいえない、と著者は嘆息する。本書はその「人身御供」の語りをその由来譚として伝える「人身御供祭祀」を分析の中心にすえ、それに要求される「暴力」と意味を考察する一書である。

広い意味での「供犠」は、共同体の相互暴力から今村仁司やそれを敷衍して赤坂憲雄のいうような「第三項」へ、中心から周縁、内部から外部へ、人間のカテゴリーを出て動物のイケニエへ、さらには餅などの供物へと「暴力」の対象が絶えず遠くへ排除されてゆくプロセスとしてとらえることができる。そのもっとも極端で原初的な形として人を「供犠」とし、神に供えあまつさえ「食物」として捧げる「人身御供」がある。「人身御供」を連想させる所作が含まれる、またその起源がそうであると言い伝えられている祭祀は日本各地に伝えられてきた。たとえば愛知県稲沢市尾張大国霊神社で行なわれる「儺追祭」で厄災を負わされて追放される「儺負人」がかつては「人身御供」だったといわれる。当初は恵方に出てゆき最初に出会った人にその役を担わせたらしいことから誰が選ばれ捕らえられるかわからない、相互「暴力」の可能性をもつ緊張関係をもっていたと推測されている。この「暴力」を統制しようとする権力者側の政策で、1743年には雇人が充当されることになり、明治期には志願制となった。著者はそうした変容のなかで根強く残る「昔は実際に人間を生贄として捧げていた」という「人身御供」の語りの果たす機能を、過去と現在とを切断すると同時に演技化した祭の本来の暴力と緊張を想像上で再現し誘発する補完装置とみる（第一章）。

また、山形県鶴岡市大山椙尾神社、大阪市西淀川区野里住吉神社、徳島県鳴門市撫養町宇佐八幡神社、福井県敦賀市櫛川別宮神社などの祭礼では、女性が神饌とともに神に「供えられる」。こうした女性が神饌を供する祭祀に対して著者は、そもそも祭礼に奉仕する女性から、神との性的な交感を連想させる「ヨリマシ」的な性格が頭屋制の整備に伴って喪失し、性的な奉仕者のイメージに食べ物のイメージが重なったものであるとの分析を示す。こうした頭屋制や宮座の体系においては、宮座内部の平等性を確認する物語としては「第三項」の一点に暴力を集中させる「人身御供」譚が都合もよかったのである（第二章）。

さらに岩手県の花巻市葛諏訪神社の供養塚など、動物供犠における動物の置き換えの変遷を語る伝承をとりあげ、それら贄が人から四足の獣、二つ足の鳥類、魚類と変化したという言説の背景に、イケニエの序列化とともに中世以降貴族社会から

徐々に浸透した殺生罪業観を読みとろうとする。中世から近世にかけて支配者層の米の収奪を意図した水田開発が進むにつれてこうした地域の人々は生きてゆくため海や川や山の生き物を殺生せずにはおれなかった。「人身御供」は最も罪深い犠牲を「過去」に措定することでそれらの罪業の罪貧感を緩和し軽減した（第三章）。

八尾市恩智神社の御供所神事、奈良市九条町倭文神社の蛇祭など近畿地方の稲作の祭には米や農作物で人形を象って神饌として奉納するものがある。これらは、神を依りつかせる形代ともみられ、神の姿を最終的に食べることで氏子が神に一体化するとも考えられる。頭屋制が確立後食物のイメージに覆われてきた女性の役割は、食べ物を供えるだけなら性の別は関係がなくなってくる。ついには特定の所作を行なう役割を果たすのが女性である必然性を失って祭礼から排除されたと推測することができるという（第四章）。

このように「供犠」と同様「人身御供」も、人間から外部の人間（異人）を経て獣や鳥や魚、人形供物などに暴力の対象を「置き換え」暴力を隠蔽し希薄化していくプロセスとして一応の了解が可能である。しかし「人柱」などと異なり、「人身御供」のエッセンスでありそれを等閑視させてきた「毒」はまさにそれを「食べる」という点にある。どんなに置き換えられようとそれは食べ物の範疇にとどまり、結局は共同体の内部で食べられ、内部に回収される。一部の「人身御供」の語りでは「異人」を食べるのでは神の望みは達することができないという。「人身御供」の語りは外部性に直結しない部分を核心に残し、第三項排除効果的「供犠」論の射程では捉えきれない側面を持つ。その「人身御供」が「供犠」論からはみ出した部分に、著者の仮説と問いかけが残される。つまり、自らも食べられる、食べられてしまうことへの想像力を含めた、神と人との一体感、いいかえると断末魔の生命力が吐露する生の実感を呼び覚ましたいという希求が「人身御供」の語りを語り継ぐ社会に底流しているのではないか、というのである（終章）。

これを機に「人身御供」を正面からとらえる研究が活発化すれば、本書はその最初の里程標の位置を占めよう。なお、本書により著者は2003年度サントリー学芸賞（思想・歴史部門）を受賞している。

（梅屋潔・日本学術振興会 / 一橋大学）

中牧弘允、ミッチェル・セジウィック編『日本の組織——社縁社会とインフォーマル活動』

東京，東方出版，2003年7月
386頁，3,800円（＋税）

本書は、1999年3月に国立民族学博物館で開催されたJAWS（Japan Anthropology Workshop）第12回研究大会における分科会「日本の組織の人類学」で発表された論文をまとめた論文集の日本語版である。同分科会は、編者の一人である中牧弘允氏がコーディネーターを務めた「現代日本の社縁文化」のセッションと、やはり編者の一人であるミッチェル・セジウィック氏がコーディネーターを務めた「日本の（フォーマルな）組織におけるインフォーマル活動」のセッションを含む2部構成であった。本書も、第一部が「現代日本の社縁文化」と題され、中牧氏の序論と、「社縁」という言葉の産みの親である米山俊直氏の興味深いコメントに続いて、9本の論文が収録されている。そのうち8本はJAWSの研究大会でも発表されたものであり、新たな追加は1本である。第二部も「日本の（フォーマルな）組織におけるインフォーマル活動」と題され、セジウィック氏の序論に続いて5本の論文が収録されている。いずれも著者自身のフィールドワークに基づくエスノグラフィックな論文であり、「実地調査に基づく理論構成」(p.1)を指向するというクラシックな姿勢は、今日むしろ新鮮だ。

14本の論文が取り上げるテーマは多様である。第一部では、京都のフランス橋建設計画を廃案に追い込んだ市民運動（第1章）、川崎市の会社員のボランティア組織（第2章）、福井県武生市の市民運動（第3章）、イギリスの日本人“女性”ディアスポラ（第4章）、シンガポールの日本人会（第5章）、シンガポールに「骨を埋めた」日本人（第6章）、ジェンダー化された日本型雇用